

第8回アジアについての勉強会

1. 日時：2011年6月21日（火）15:00～17:00
2. 場所：武田計測先端知財団会議室
3. 講演タイトル
「カンボジアと日本」
講演者 国際協力機構客員専門員 力石寿郎氏

4. 出席者：

01	力石寿郎	国際協力機構客員専門員
02	金澤恒夫	エクセルオブメカトロニクス 代表取締役
03	武田郁夫	財団理事長
04	赤城三男	財団専務理事
05	垂井康夫	財団常任理事
06	溝渕裕三	財団理事
07	大戸範雄	財団理事
08	相崎尚昭	財団 Program Officer
09	姥澤愛子	財団 Program Specialist
10	禿 節史	財団 Program Specialist
11	鴨志田元孝	財団 Program Specialist
12	三井恵美子	財団 Program Officer
13	高見	財団職員

5. 議事録

講師の力石氏は、1976年に早稲田大学を卒業し、国際協力事業団(JICA)に入団。1980年には、外務省に出向し、パプアニューギニアの日本大使館に勤務、また、1988年には外務省経済協力局で無償資金協力予算の JICA 移管に尽力された。1993年には JICA の企画部地域第三課長に就任、中近東・アフリカ・中央アジア・東欧・旧ソ連の ODA を担当された。また、1995年には、フィリピン事務所次長、2002年にはカンボジア事務所長、2006年には中東・欧州部長、2008年には広報室長を歴任、現在は JICA の国際協力客員専門員をされている。本日は、カンボジア事務所長時代のご経験を基に、カンボジアと日本についてお話していただく。

カンボジア王国の概要

歴史と文化

カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムの4か国を称してCLMV諸国と呼ぶ。これらの4か国は、経済発展が遅れ、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポール、ブルネイの6か国に遅れてASEANに参加した。先行した6か国とは大きな経済格差があり、JICAの援助でも先行する6か国とCLMV諸国との格差是正が課題となっている。

カンボジアの歴史を簡単に述べると、1世紀ごろにカンボジアの源となるような国ができ、5世紀頃にヒンズー教が伝わった。7世紀に仏教が導入され、アンコールワットができる12世紀前半にまた、ヒンズー教に変わった。アンコールワットはヒンズー教の寺院である。その後また仏教になったりヒンズー教になったりしている。現在は、ほぼ100%仏教である。カンボジアを語る場合、クメール王朝を抜きにすることはできない。13世紀のクメール王朝は、カンボジアを中心として、ベトナム東部、タイ、マレーシア半島全土に最大の領地を持っていた。クメール王朝は、9世紀から14世紀にかけて存続し、インドシナに大きな文化的影響を及ぼした。例えば、タイのダンスはクメール王朝時代のアプサラ・ダンスの影響を受けているし、タイのお寺の屋根には突き出た棒状のものがあるが、これは蛇を表しており、クメール王朝時代のヒンズー教の影響が残ったものである。14世紀になるとシャム族(タイ)がクメール王朝の領土を侵食するようになり、15世紀にはアンコール王朝の首都だったアンコールワット付近の首都を断念し、南下して今のプノンペンの辺りに遷都した。18世紀になるとベトナム側からチャンパという民族に侵食され、19世紀に現在のような領土に縮小し、プノンペンを正式の首都とするようになった。1887年には、フランスがカンボジアを植民地化した。1945年には、日本軍が駐留していた期間があったが、幸いにも、日本軍は良政をしき、負の遺産を残さなかった。今の首相のフンセン氏は、「カンボジアと日本の間には一点の曇りもない」という表現で日本に対する好感情を表したことがある。

1953年にフランスから独立した時の国王がシアヌークで、独立後17年間直接執権を取った。カンボジアは、東西冷戦の板挟みとなり、非常に困難なかじ取りを余儀なくされた。当時、インドシナ半島は、米国、ソ連、共産中国の勢力争いの場となり、火薬庫のような状態だった。隣のベトナムでは北ベトナムをソ連や中国が支援し、南ベトナムを米国が支援して、ベトナム戦争が起こっていたが、シアヌークは米国、ソ連、中国に対して等距離外交を行った。当時、北ベトナムから南ベトナム民族解放戦線に軍事物資を輸送するホーチミン・ルートがあり、その一部がカンボジア領内を通っていた。米国は、シアヌーク国王にカンボジア国内のホーチミン・ルートを閉鎖するよう圧力をかけたが、シアヌークが放置したため、米国のCIAが軍事クーデターを画策し、当時外遊中だったシアヌーク国王を失脚させ、ロンノル政権を打ち立てた。ロンノル政権

は、米国の要求に応じてカンボジア国内のホーチミン・ルート爆撃を許可した。これが、ベトナム戦争がカンボジア、後にラオスまで巻き込むきっかけとなった。ロンノル政権は全くの対米追随政権だったため、カンボジア北部にいた親中国共産主義グループのクメール・ルージュが勢力を拡大し、1975年に政権をとった。クメール・ルージュのリーダーだったポルポトは、極左主義をとり、西欧から輸入した全ての文化・文明を拒絶し、法律、経済、技術、文化、宗教を否定した。ポルポトは、中国の文化大革命と同様の政策を行おうとして、都市部の人民を農村部に移住させると同時に、教育のある全ての人々を殺戮した。1975年から5年間続いたポルポト政権時代に、人口の3分の1に当たる約300万人の人々が虐殺された。虐殺は、知識人を対象として行われ、各界の指導者、芸術家、教育者等が全て殺されたため、カンボジアに大きな人材のブラックホールが生じた。これが今日までカンボジアの発展を阻害している。ベトナム戦争の終結によりインドシナ半島から米国の影響力がなくなった隙に乘じ、1979年にはベトナム軍がカンボジアに侵攻し、親ベトナムのプノンペン政権を樹立した。以降、プノンペン政権と3派(シアヌーク派、共和派、クメール・ルージュ)による内戦が続いたが、1991年にパリ和平協定が調印され、カンボジアは国連の暫定統治下に入った。日本は、パリ和平協定成立のための3派合意を取り付ける等の裏方的な仕事を行うと共に、国連暫定統治機構(UNTAC)のヘッドとして明石康氏を送り込んだ。1992年から93年にかけてUNTACが平和構築活動を行い、日本の自衛隊もPKO活動に参加した。これが、自衛隊にとって初の海外派兵となった。2年間のUNTAC統治の後、1993年に総選挙が行われ、新憲法が発布され、現在のカンボジア王国が成立した。しかし、1997年に王党派と人民党の間で対立が激化、王党派が追い落とされる形でフンセン氏が政権基盤を確実なものにした。王党派は、フランス植民地時代から優遇されており、カンボジアとフランスの二つの国籍を持っていた。フンセン氏は、「王党派は何かあるとフランスに逃げてしまう。人民党は、一歩たりともカンボジアを離れない」といって王党派を非難した。フンセンの人气が上がり、人民党は、1998、2003年の選挙でも圧勝した。その後、安定政権が続いている。

地理的特徴

インドシナ地域の地理を語る上で重要なのは、メコン川の存在である。中国から始まって、ミャンマー、ラオス、カンボジア、タイ、ベトナムを流れており、全長が4023kmで、源流は奥チベット。平均流量は、16000m³/sec。インドシナ地域ではメコン川の豊富な水量の恩恵を受けて流域に農業が発達し、メコン川がこの地域の発展を支えてきた。このメコン川の有効な管理を目的としてカンボジア、ラオス、ベトナム、タイ、ミャンマーがメコン川委員会を設置して

いるが、最も上流の中国はメコン川委員会には入っておらず、勝手にダムを作ったりしてメコン川委員会との連携が取れていない。メコン川は国際河川であるが、ラオスからカンボジアに入るところで滝になっており、両国間を船で通ることはできない。ラオスは山が多いが、カンボジアは平らで、カンボジアから下流は、国際河川になっていて水運が発達している。カンボジアの中央部には乾季で琵琶湖の4倍の広さを持つトンレサップ湖という湖がある。トンレサップ湖を源流とするトンレサップ川とメコン川がプノンペンの付近で合流するが、雨季にはメコン川の水量が増大し、トンレサップ川が逆流し、トンレサップ湖が6倍にも拡大する。トンレサップ湖は森林を浸水して拡大するが、その際、魚が浸水した木々に卵を産み、大量の魚が発生する。このようなことを毎年繰り返すため、トンレサップ湖は多様な生命を育み、生物多様性の宝庫となっている。雨季におけるカンボジアでの洪水は、ゆっくり発生するため、人的被害は少なく、むしろ様々な恩恵をもたらすものと考えられている。メコン川流域の国々は、共にメコン川の恩恵を被っていることから共通の利害関係を持ち、ASEANの結束が固い理由の一つとなっている。

国土と人民

カンボジアの面積は18.1万平方キロ、日本の約半分。人口は、1,410万人。一人当たりの面積は、日本の5倍。民族は、クメール人が90%以上。一人当たりGDPは、830ドル(日本は38,000ドル)。平均寿命は62.1歳(2009年)。宗教は97%が上座部仏教で、イスラム教1.9%。男子は、兵役の代りに一度は仏教修行をすることになっている。政治体制は国王を中心とする立憲君主制。上院と下院がある。主要な産業は、農業(人口の7割から8割が農村に在住)、縫製(Yシャツ、靴等)を中心とする軽工業、観光業。資源は、森林資源が豊富、水産資源(淡水魚と海)、石油と天然ガスは試掘中。商業ベースに乗る程度の埋蔵量が確認されている。元々は宝石が取れたが、ポルポト政権がタイの国境付近に逃避した時、宝石を沢山掘って売ったために、今はあまりない。鉱物としては他にボーキサイト、ニッケルが若干ある。宗教は、上座部仏教。外交政策は全方位で、北朝鮮やキューバとも国交がある。全方位外交をとっているが、基本的には民主主義国家、自由貿易体制、自由経済圏の国ということになっている。99年に10カ国目の加盟国としてASEANに参加した。最近は、高い経済成長を続けており、講師がカンボジア事務所長時代は13%の経済成長を達成していた。その後リーマン・ショックで成長率は下がったが、また回復している。電化率は低く、田舎では91%の人が薪を料理に使っている。小学校の就学率は97%であるが、卒業する子供は約80%。乳幼児死亡率は、60人/1000人(日本は、3/1000) 主要幹線道路は大分整備されたが、道路の舗装率は低く、雨季には4DWの車でも難渋

する。内戦当時大量の地雷が敷設されていたが、現在、居住地域の地雷は除去された。地雷の原価は50円程度であるが、地雷除去には15000円もかかる。つい最近まで、不発弾で死亡する人が多かった。不発弾の弾頭が売れるため、不発弾から信管を取り外そうとして爆発する。現在は、弾頭の売買が禁止され、不発弾事故は減りつつある。国民は大変正直で、治安もいい。内戦前は、ホテルのベッドにお金を忘れて出かけ、部屋に帰って見たら、金種毎に揃えてあったという逸話もあるほどである。プノンペンには、日本料理屋が30軒程度あり、日本人には住みやすい。カンボジアは大変美しい国で、是非、一度、カンボジアに行ってみよう。

日本の協力

日本は、1953年にカンボジアがフランスから独立して以来の最大の友好国の一つ。王国ということもあり日本の皇室との交流も長く良きパートナーになっている。

日本は、主として1991年からカンボジア支援を拡大し、2009年までの援助実績は、有償資金協力が313億円、無償資金協力が1383億円、技術協力が555億円で日本が最大の援助国であった。先ほど述べたように、ポルポト政権による知識人の虐殺により、あらゆる分野の指導者、有識者、教育者、技術者がいなくなったため、平和になっても誰も何もできない状態になってしまった。日本は、カンボジアにおける人材のブラックホールを埋めるため、技術協力を注力した。リーダーとなる人を日本に留学させて教育し経験を積ませ、彼らを中心として次の世代のリーダーを育てるということを繰り返し行って、コアとなる人、リーダーを育成した。一つの組織体がちゃんと動くようになるまで10年かかる。例えば、プノンペンの母子保健病院は、日本の支援により医師、看護婦、薬剤師を揃え、ちゃんと自立して運営できるようになったが、これに10年かかった。また、日本は、内戦でぼろぼろになっていた水道設備を整備しただけでなく、維持管理をするための科学者、土木技術者等の人材を育成したが、これにも10年かかった。今では、プノンペンの水道のロスが、5.6%になっており先進国に匹敵する水準になっている。日本が整備を始めたころは、ロスは70%に達していた。日本は、終始一貫してカンボジアを援助した国で、カンボジア人から大変信頼され、尊敬されている。

カンボジアの援助は日本がトップであったが、最近は、中国が援助額を拡大している。先進国が途上国を援助する場合、色々なルールに従って行すが、中国はそのルールにお構いなく援助を行う。色々と注文を付けず援助するので、カンボジアからは有難がれる一面もある。中国が援助をする場合、着手が非常に早い。中国から技術者や労働者、労働者のための料理人等を連れてきて地

元の業者を使わない。工事が終わると、中国人の技術者、労働者は引き上げるが、料理人は地元に残って商売を続け、中国の拠点を残す。工事によってインフラはできるものの、カンボジアの地元には金を落とさず、技術的な蓄積も残さないのので、中国の援助は疑問視され始めている。

質疑応答

質問者 1:

カンボジアにおける華僑の影響は少ないのでしょうか。

講演者:

華僑の影響は大きいと思います。商売をしている人たちの7割以上が華僑系です。但し、援助でやってきたという人ではなく、カンボジアに同化した昔からいる華僑です。中華街があり、中国語の新聞が読まれています。

質問者 2:

ポルポト政権時代は、華僑の人々はどうなったのでしょうか。

講演者:

華僑は、虐殺される側だったので、多くの人が避難民としてタイ側に逃げました。ポルポト政権時代には、難民が何百万人も出ました。中国の文化大革命では、自己批判すれば許してもらえたのですが、ポルポトはすぐに殺してしまった。

質問者 3:

東南アジアでも少子高齢化が進んでいるようですが、カンボジアはどうか。

講演者:

カンボジアでは、平和になってから生まれた人が多く、平均年齢は若いと思います。

質問者 4:

カンボジアの製造業はどうなっているのですか。

講演者:

外国資本が産業加工区に入って製造しているという例はありますが、国産企業はほとんどありません。米国や欧州がカンボジアに対して最恵国待遇を与えているので、米国や欧州に対しては関税なしで輸出できます。中国は、賃金が上がリストライキも多発するので、製造業がカンボジアのような低賃金の国に移動し始めているようです。最近、日本でもカンボジア製の製品を多く見かけるようになりました。

日本からは、スズキが進出してバイクをつくっています。日本企業では、ミネルヴァも進出するという話です。カンボジアでは街中はバイクだらけです。

一番人気があるのは日本製のバイクです。中国製が一番安く、日本車の中古品より安く買えます。日本製品に対する信頼度は非常に高い。日本の会社は、合弁で事業をしていますが、現地の従業員を教育したり、大事にするので人気があります。中国の企業も進出していますが、従業員を交換可能な労働力としてしか見ないのであまり人気はありません。

質問者 5:

カンボジアでは、雨季には道路も冠水するという話ですが。

講演者:

新しく道路整備する時は盛り土をして高い位置に作り、のり面を保護しているので、冠水はありません。しかし、雨季になると10m水位が上がるので、道路が冠水することがあります。プノンペンの川に無償資金協力で河川港をつくったことがあります。乾季にはプラットフォームから船は見えません。船は、というと10mくらい下にあるのです。雨季になると水面が10m上がってくるので船が見えるようになります。不思議な光景でしたね。

質問者 6:

言葉はどうですか。

講演者:

クメール語ですが、英語でも通じます。日本人の観光客が多いせいか、観光地では日本語でも通じます。カンボジアは、フランスの植民地だったので、プノンペン大学の外国語講座はフランス語だったのですが、フランス語の人気は急降下しています。コンピュータ言語が英語ということもあり、今は英語が最も人気があります。2003年頃、JICAは国際交流基金と一緒にプノンペン大学に日本語講座をつくったことがあります。大変な人気で定員50名のところに200人以上の応募がありました。一方、フランス語講座は定員100名のところ3人しか応募がなく、当時のフランス大使が青くなったという話があります。

以上